

年 頭 雑 感

農林省農林水産技術会議研究総務官 川嶋良一

あけましておめでとうございます。

昭和も51年目に入り、今年もさまざまな事柄が次々におこって、一喜一憂しながら歴史をつみかさねてゆくことと思いますが、植調の関係者にとって、よりよい年になりますように、年のはじめにあたって、心から祈念いたします。

＊ ＊ ＊

日ごろご無沙汰をしておりますので、あらためてモノをかくということになりますと、ものおじしてしまいますが、年のはじめの曙蘇気分で、思いつくまま、お目をけがしたいと思います。

さて、何よりも驚き、かつ感嘆にたえないのは、除草剤の使用の増加ぶりです。最近号の巻頭言で、残留農薬研究所の堀理事長が述べておられるように、これまで1～2度ならず、除草剤の伸びも、もうここらが山かと考えられながら、かえってその都度、大きく飛躍してきたことは、関係者の努力のたまものとはいえ、奇跡的とさえ思われます。

戦後まもなく、2, 4-Dが登場したころに、このような発展を予想することはできなかったと思います。また、PCPの威力は、もはや水田では雑草が根絶してしまっていて、除草剤の必要もなくなるのではないかとさえ思わせました。いまにヒエの種子を水田にまいて歩かないと失業してしまうぞ、などとケンカラヌ冗談をいいあったことがウソのような気がします。

それにしても、これほど除草剤の使用がふえても、水田でさえ手取除草が全くなかったとはいえないようです。まして、除草剤がまだ一部にしか使われていない畑では、除草に人手を多くかけています。除草剤の有効適切な使用を期待されている場面は、まだまだ多いといわなければなりません。目にみえていて、放っておけば作物は減収し、作業の邪魔になる雑草の防除から人手のいらなくなることの一日も早くおとずれることを期待したいものです。

＊ ＊ ＊

除草剤の発展にたいする期待が大きければ大きいほど、雑草そのものについての研究の重要性がましてくることもいうまでもないことでしょう。日本人はせっかちなので、敵を知ることにかかる努力をとにかく怠りがちで、てっとり早く除草剤でかたづけようとあせりすぎますが、この点は大いに反省の必要があると思います。

病虫害防除のほうで、最近は総合防除の必要性が強調され、実効もあがりつつあるようですが、この点は雑草防除のほうが先輩かもしれませんが。というよりは、雑草防除のほうは除草剤だけで防除するところまではいかないの、やむを得ず総合防除的なのであって、できれば除草剤の単独防除だけですませたいと思っているのかもしれない。

しかし、除草剤を有効適切に使用するためには、雑草の状態を最小量、最小回数の除草剤使

用で防除できるようにしておく必要があることはいうまでもないことで、このためには雑草自身はもちろん、栽培技術全般にわたって、雑草とのかかわりあいを究明しなければならないでしょう。

ところで、総合防除について、最近こんなやりとりがありました。総合防除の総合という意味はどういうことかね、というのです。防除はもともと総合的であるべきで、いまさらなにを総合するというのか、というのです。ちょうど、農林省が総合農政や総合食糧政策というときに、ねらいのコメ退治をかくしてもっともらしく粧うのと同じで、農薬の評判が悪いので、農薬を使わないですむような粧いをみせかけるために、総合防除などというのではないか、というのです。

農林省の役人にとって、総合農政や総合食糧政策にたいする非難は、「そんなことはありません。文字どおり諸施策を総合して全力をあげて農政なり食糧政策を推進する所存であります」と反論することになります。総合防除のほうはどうでしょうか。まにあわせの考え方なり方法でない、ほんとの意味での総合防除ならば、雑草防除もそうありたいものだと思います。

＊ ＊ ＊

わが国の除草剤の歴史は、戦前の少数の研究をのぞけば、戦後25年にすぎません。雑草の研究にしても、農林省の試験場で本格的に研究をはじめたのは、戦後まもなく、農事試験場の鴻巣試験地に雑草防除研究室ができてからですから、これも30年に満たないことになります。それにもかかわらず、除草剤はいまや殺虫剤を凌駕しようという勢いにあり、植調も10周年をむかえて立派な研究所をつくるなど発展の跡がいちじるしいし、雑草防除研究会も15年たらずで

昨年には日本雑草学会と発展しました。まことによるこぼしい限りです。

雑草と雑草防除の関係の研究者も量・質ともに増大し、研究内容も年々充実してきていることも、よろこばしい限りです。とくに、現在の各方面の最高指導陣が、ほとんど戦後の創成期に第一線で活躍した方々であることは、まさに花開くという感じで、豪華けんらんたるものがあります。

ひるがえって、私ども農林省の試験研究機関についてみますと、これだけの発展にくらべて、雑草や除草剤を専門に研究することをうたっているのがわずか5研究室でいどしかないということは、やや奇異の感がしないでもありません。もちろん、栽培関係の研究室には雑草関係の研究者がかなり散在してはいますが。

これだけの大きな分野の研究推進が、専門の研究室の数だけの問題ではなく、ほかの面でもいろいろと考えさせられることが多いような気がします。雑草防除研究の発展のために、いま何ができるのか、いま何をしておかなければならないのか、新年の課題にふさわしい——などといっちは屠蘇気分がさめてしまいそうですが——いろいろな機会にお互いに考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

とりとめのないことになりましたが、おゆるしのほどを。

年間購読料・送料の改訂について

昭和51年1月より、郵便料金が大幅に値上げされましたので、下記の通り改訂させていただきます故、何とぞご了承下さい。

記

年間購読料：3,000円

1部の郵送料：100円